

2014年1月19日 主日礼拝

説教 幸福の秘訣

詩篇 1 篇 1-6 節

【詩篇とは？】

「詩篇は詩である」と言ったのは C・S・ルイス。詩というのは、人間のこころや気持ちや感情を表すもの。詩篇にも敵を呪う言葉などいくらでも出てきます。そういうところを読むと、私たちは首をかしげます。けれども「詩篇は詩」。聖書は「敵を呪う」ことを正しいことだと言っているわけではないけれど、聖書は「敵を呪わずにはいられない」私たちの思いを頭ごなしに否定しません。聖書は、つまり神さまは「敵を呪わずにはいられない」私たちをまず受けとめてくれます。それから、そんな思いを癒すのです。

【詩篇全体の要約】

詩篇は全部で 150 篇ありますが、第 1 篇は詩篇全体の要約だと言われます。中でも 6 節は、第 1 篇の要約。だから 6 節は、詩篇全体のたましいのようなところ。「まことに、主は、正しい者の道を知っておられる」(6)。この「知る」ということは単に、「頭で知る、知識を得る」という意味ではありません。聖書の「知る」(ヘブル語のヤーダー)は、たいへん深い知り方を意味します。たとえば、妻が夫をヤーダーすると子どもが生まれるのです。聖書の「知る」は人格的な交わりです。もっとも深い、たがいの全人格をあげて取り組む交わりなのです。そして、神さまはそのように私

たちに取り組んでくださって、私たちに「私はあなたを知りたい。あなたに私を与えたい。そしてあなたも私にあなたを与えてほしい」と願われます。まるで男女の間の性の営みのような深い交わりを求めておられるのです。

【人格的な神さま】

お母さんは、母乳を与え、だっこし、子守歌を歌って、子どもに安心を体験させ、心を通い合わせることを、お母さんを信頼することを教えます。そして、子どもがお母さんの喜びであることを感じとらせます。まさに全人格的な交わりです。そして、自分自身を子どもに注ぎ込みます。聖書の神さまは、お母さんに近い神さまです。

この神さまをどのようにすれば知ることができるでしょうか。それは頭で考える理屈ではなく、心を揺さぶる感情でもなく、自分の存在がうなずくことによって。子どもが、頭でもなく、感情でもなく、ただお母さんに抱かれていることに納得しているようにです。私たちは神さまを発見するわけではありません。むしろ私たちは自分を発見するのです。神さまの手に抱かれている自分を発見するのです。

【幸福の秘訣】

「その人は、水路のそばに植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える」(3)。ルターは、この木を「なつめやし」だと想像しました。たわわにものごい量の実を結び、150 年も実をならせ続ける木

です。詩篇 1 篇の実のなる木は、自然に生えている木ではなく、灌漑水路のそばに植樹された木。この木は、神さまにつながって、神さまの人格的な交わりに生きる人のことです。

幸福とは、人間の交わりのうちにある。たがいに与え合う深い人格対人格の交わり、それが幸福なのです。もし神さまがいるなら、その神さまは人間以上であるはず。人間でさえも、お金やモノや快樂よりも、たがいに自分を与え合う交わりに幸福を感じるなら、神さまは、もっとそうであるにちがいません。

【キリスト教の核心】

先週のイングリッシュ・カフェで、「ユダヤ教とキリスト教はどうちがうのか」と訊かれました。答は、キリスト教徒は「救い主はすでに来た」と信じているのに対し、ユダヤ人は、「救い主はこれから来る」と思ってまだ待っていること。その救い主がイエス・キリスト。神が人となってこの世に来てくださり、十字架に架けられました。それは、私たちが神さまに抱きしめられていることに気がつかないで過ぎてしまうことに耐えられないから。私たちが、たがいに自分を与え合うことに失敗していることを見たいから。私たちが本当の幸福を手に入れずに苦しむことに痛むあまり。このことに気づくとき、私たちは豊かな実を結びます。愛し愛されることによってしか得ることが出来ない幸福という実を結ぶのです。この神さまに背を向けることはありませんように。